



# 美しき名馬の故郷

文  
ナチョ・サンチェス  
写真  
アナ・ウイクス

優美で強健なカルトジオ馬は、長い年月をかけて育種されてきた。その力強さと高貴な気質は、15世紀の修道士の団による保護育成から始まった、数世紀にわたる献身の賜物だ。スペインのカディス県ヘレス・デ・ラ・フロンテーラの郊外では、今日も、この美しい馬種を守り育てるために細心の努力が払われている。

生まれてからわずか48時間の仔馬、フビロソの黒っぽい毛並みに覆われた体は、小さく華奢で、足元もまだおぼつかない。母親の側から離れる勇氣はまだないが、大きく見開いた目には驚きや好奇心、そして熱情がみなぎっている。スペイン語で「喜びに満ちた」という意味の名前を持つこの仔馬は幸せそうだが、自分がどれほど幸運に恵まれているのかには、気づいていない。フビロソは伝説の血統に生まれてきた。並外れた優雅さと知性、勇気、気高さ、そして芯の強さを備えたカルトジオ馬なのだ。

フビロソの種族はブラ・ラサ・エス・バニョーラ、つまりスペイン純血種に属する数少ない選ばれし血統のひとつで、その歴史は優に500年を遡る。自身は知る由もないが、将来はスペインの王室警備隊グアルディア・レアルに入隊するかもしれない。馬場馬術競技会で優秀な成績を収めるかもしれない。そして運がよければ、種牡馬として種族の未来を守る重要な役割を担うことになるだろう。

フビロソは、カルトジオ馬の血統を守る

イエグアダ・カルトウジャ・イエロ・デル・ボカド種馬牧場で生まれた。アンダルシア地方の小都市ヘレス・デ・ラ・フロンテーラの郊外に広がる、歴史的なフエンテ・デル・スエロ牧草地に位置するこの牧場は、約220ヘクタールの敷地を有する世界屈指の美しい馬の生産地だ。現在300頭以上の馬を飼育しており、カルトジオ馬の保護と改良を主な目的としたカルトジオ血統協会に属する35の牧場のなかでも、最大の規模を誇る。この馬種の特徴は何となく、その優雅さ、体高、歩様の軽快さ、そして性格の気高さにある。「美しい姿と乗り手を選ばない順応性を併せ持つこの馬種は、唯一無二の存在なのです」と、全体で約900頭の馬を所有する同協会のフランシスコ・レアル会長は語る。

カルトジオ馬の起源を理解するには、約800年前まで歴史を遡る必要がある。13世紀、ヘレス・デ・ラ・フロンテーラをイスラムのカリフ制支配から奪還したキリスト教徒は、守りを固めるために24名の騎士を市内各所に駐屯させた。それから2世紀後、ある騎士がこの上なく美しい

フビロソは伝説の血統を引き継ぐ。並外れた優雅さと知性、勇気、気高さ、そして芯の強さを備えたカルトジオ馬なのだ。



【前見開きページ】  
カルトジオ馬はスペインで最も名高い品種のひとつ。馬場馬術などの競技で卓越した能力を発揮することで知られる。  
【前ページ】  
(上) イェグアダ・カルトウジャ・イエロ・デル・ボカド種馬牧場の騎手イグナシオ・ボンマティ。左はヘネロソ・テ・カルトウジャ、右はアルファレロ・テ・カルトウジャ。  
(下) イリシターノ2 (II) のような鹿毛の成馬は珍しい。多くは仔馬の時は栗毛(当ページ上)だが、成長と共に芦毛になる。ほかの仔馬同様、フビロソも3歳までは牧草地で過ごす。  
【当ページ】  
(下) アルヘンティーノ25 (XXV) は多くの子孫を残した高齢の種牡馬だ。

印象的だ。ここでは怒鳴り声を耳にすることはない。言葉よりも雄弁なボディランゲージがあるのみだ。褒めるだけでなく叱ることも重要なコミュニケーションは「騎手のタッチ」として知られている。「私たちは騎手であると同時に、心理学者でもあるのです」と、ファン・ポスコは言う。カデイス県チクラナ・デ・ラ・フロンテラにある馬牧場で生まれ、物心ついた頃からずっと馬と触れ合ってきた彼は、「これは単



なる仕事ではなく生き方なのです」と強調する。調教の合間、馬たちはブルーゲンビリアの鮮やかなピンク色の花に囲まれた、砂敷の快適な馬房で休憩する。それぞれ隣り同士の馬房に繋がれているためコミュニケーションがとりやすく、毎日午後になると一斉にいななく声が響き渡る。ここでは、オヘアドール5 (V)、オルビタード7 (VII)、エンカンタード49 (XLIX)、オサド65 (LXV)、アンタルス58 (CLVIII)、

アルタネロ203 (CCIII)をはじめとする馬たちが暮らしている。彼らの祖父はアモソ31 (XXXI)だ。30歳になるアモソは、馬の平均寿命を超えているにもかかわらず、驚異的な体格と活力を維持している。「彼らは生きた歴史遺産です」と場長のジュディット・アンダは言う。「ごついブーツを履いた多数の厩務員たちが、総出で馬たちの健康管理に努めている。一頭ずつ馬欄でブラッシングして下毛の汚れを取り除

き、蹄をきれいに掃除して油を塗り、専用のシャンプーと、さらにコンディショナーで、前髪やたてがみがさらさらと風になびくように仕上げるのが毎日の儀式だ。ほかのどの馬よりもこの施術を楽しんでいるのがアルヘンティーノ25 (XXV)で、競技のために編み込まれた長いたてがみをなびかせながらエレガントに歩き、カメラに向かってポーズをとる。牡馬たちが馬場馬術の訓練を受け、種牡馬として世話をされる一方



記念碑を建てるために自らの遺産を寄進する。この願いは、セビリヤの修道士たちが移り住んだカルトウジャ・デ・サンタ・マリア・デ・ラ・デフエンシオン(カルトジオ会修道院)で実を結ぶ。当時、修道士たちは土地を貸し、ワイナリーを所有し、近くを流れるグアダレテ川の漁港まで管理していた。そして1484年、彼らは後に自分たちの名を冠することになる馬の交配に乗り出した。修道士たちは、先史時代からこの地域の在来種であり、険しい地形や過酷な農作業に適応したアンタルシア馬を厳選することから始めた。彼らは科学的な専門知識よりも直感を頼りに、完璧を求めて最良の個体を交配させた。修道院はこれらの馬を献身的に世話し、国王や貴族にふさわしい存在であることを示す、卓越性と警戒さを象徴するベル型の焼印を考案した。この独創的な修道士たちの伝説は代々受け継がれ、やがて修道士たちが修道院から去ると、焼

印は2000年にイェグアダ・カルトウジャ・イエロ・デル・ボカドに遺贈され、現在はこの馬種の歴史と種馬牧場を支えた先人たちの記念品として保存されている。「こうして500年の歴史を持つ至宝に携わることができるのは名誉なことです」と、経験豊富な馬術家のイグナシオ・ボンマティは語る。32歳になる彼はこの4年間、この種馬牧場で懸命に働いてきた。彼は現在、「性格とハートの強さ」で際立つ8頭の馬の調教を監督している。前者の特質はこの馬種の気高さに、後者はその労働能力に見てとれる。カルトジオ馬は、騎手と無二の絆を築き、お互いのわずかな仕草や視線で意思疎通を図ることを可能にする。調教の様子を見ると、まるで劇場にいるかのような気分になる。力強い足の運びと裏腹に、地面から浮くように常歩、速歩、駈歩の3種の歩様をこなす生まれ持った大胆さに感銘を受ける。騎手の繊細さも



【当ページ】  
 (上) アルタネロ203 (CCIII、左) は、その美しい歩様で馬場馬術において数々の賞を受賞している。エンカンタード49 (XLIX、右) の遺伝子を入念に調べた結果、その子孫は馬場馬術に優れた適性を持つ可能性が高いことが分かった。(左下) 競技用に編み込まれたたてがみ。馬たちは細心の注意を払って扱われる。(右下) モスケロと呼ばれる

スペインの伝統的な乗馬用アクセサリ。通常は革または馬の毛でつくられ、ホルラスと呼ばれるタッセルで構成される。モスケロは馬勒の飾りとして用いられるほか、ハエよけの役割も果たす。【次ページ】カルトジオ馬の血統を象徴する筋肉質の長い背、なで肩、腰高の体型をしたアルタネロ203 (CCIII)。カルトジオ会修道院にて。

で、牝馬たちは繁殖に専念する。通常、午前中を厩舎で過ごし、その後は仔馬たちと牧草地を気ままに歩き回る。

「牝馬は血統保存の要」と、厩務長のファン・ペドロ・アギラールは言う。彼はその昔、少年厩務員としてこの種馬牧場で働き始め、やがて叔父の仕事を引き継いだ。家族に伝わる知恵や知識を受け継ぐ彼は、牧場にいる馬をすべて知り尽くし、もちろん名前も覚えている。それもその

はず、馬たちが生まれた時からずっと一緒にいて、牝馬の出産を何度も手伝っているのだ。「どうです、なかなかのものでしょう」。馬具や乗馬用品で埋め尽くされた博物館のような事務所、アギラールは満足そうな表情を浮かべる。その多くは自ら手づくりしたものだ。牧場では伝統が重んじられるが、ここではイノベーションにも力を注いでいる。進化の著しい繁殖技術についてはそれが顕著で、敷地内に併設された近代

的な繁殖クリニックでは、経験豊富な獣医師チームが、最先端の技術を駆使して仕事に専念している。種牡馬の質の高さは、この牧場の大きな誇りだ。

カルトジオ血統協会に属する各種馬牧場の努力によって、この馬種の新しい世代も威信と品質の象徴として注目され続けることだろう。

も、血統の改良に熱心な顧客を魅了している。しかし、カルトジオ馬の多くはその故郷、ヘレス・デ・ラ・フロンテラの周辺で暮らし、数世紀の歴史を持つ威風堂々としたこの馬種の伝説の保存に積極的に取り組む、熱心な地元の人々によって所有され、飼育されているのだ。

オナー・エリア「マガジン・エキストラ」にて、この記事の関連コンテンツを掲載しています。QRコードからぜひご覧ください。 [patek.com/owners](http://patek.com/owners)

